

パフォーマンス作品の再演における「ラディカルさ」の喪失と再出現 —— マリーナ・アブラモヴィッチによる《Lips of Thomas》の再演

大磯 日向子 (京都大学)

マリーナ・アブラモヴィッチ (Marina Abramović, 1946-) は、過酷な状況や自傷的な行為によって自らの身体と精神を限界へと追い込んでいく過激なパフォーマンスで知られる、旧ユーゴスラヴィア出身のアーティストである。彼女の作品の中でも 2005 年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で行われた《Seven Easy Pieces》は、彼女自身の過去作品と他のアーティストの過去作品を再解釈・再構成して再現する「再演(re-performance)」という方法がとられ、その充実した内容に留まらず、パフォーマンスのアーカイヴ方法としての再演への保存修復学的な観点からの注目も集めた作品である。

本発表では《Seven Easy Pieces》の 6 日目に行われたアブラモヴィッチ自身の作品《Lips of Thomas》(初演 1975)の再演に着目する。本作品は初演時、彼女が自分の身体を痛めつける光景に耐えられなくなった観客によってパフォーマンスが中断された。ところが 2005 年の再演時には観客による介入や中断は起こることなく最後には拍手喝采が巻き起こった。1960、70 年代のパフォーマンス作品の一回性、予測不可能性、偶然性を重要視する頑なな姿勢や、過激主義的でスキャンダラスな表現はしばしば「ラディカル」という語で形容され、それらの再現や美術館での収蔵・保存は困難であるとされてきた。

《Lips of Thomas》の初演と再演における明確な観客の反応の違いからも、再演時には初演時の衝撃や事件性が失われているような印象をうけ、再演という方法がパフォーマンスアートの本質に反するものであるようにも感じられる。しかし、反対に、再演を行うことで初演時にはなかった意味が付与されたり、パフォーマーや観者の体験に何かしらの変化があらわれることで、新たな価値を獲得する可能性もあるのではないだろうか。本発表ではそれらを初演時の「従来のラディカルさ」に対して、再演によって発生する「新たなラディカルさ」と呼びその内実に迫っていきたい。

そこで本発表では次の二つの要素に着目する。一つ目はパフォーマーの「古い」に関する問題、すなわち「見られる身体」が規範から逸脱することで起こる変化である。そして二つ目は作品外部の社会的状況の変化、具体的には作品の意味がすぐ替えられてしまうような出来事が起こることでもたらされる内容や受容の変化である。以上二つの観点からパフォーマンスの内部・外部で起こった変化を観察し、他のアーティストの実践との比較を行うことで、《Seven Easy Pieces》において再演という枠組みがもたらす「新たなラディカルさ」の存在を明らかにし、パフォーマンスのアーカイヴ方法としてだけでなく、芸術的表現・体験としての再演の可能性を検討することが本発表の目的である。